「日本語教師になる！」ボストン旅した彼女に何が…

この夏私の周りでは、語学留学の出国ラッシュだった。

「英会話スクールに行っても、1回も実践がないと意味ないだろ。第一、英文科の学生なのに。一人でアメリカ行って来い」

唐突な父の言葉から、Sのボストン1週間の旅は決まったらしい。

「でも女の子一人じゃねぇ」

結局は伯母も同行して、丸1日の市内観光と2日間の自由行動というパック旅行に。市内観光では、ハーバード大学や大きな図書館を見てまわった。旅のアルバムには、歴史を感じさせる建物や現地の人と一緒に撮った写真がたくさん並んでいた。

「とにかく人と接することが好きなんだ！」

いつもそう言っているS。自由行動の日は、ホテルから出たがらない伯母を残して、朝からボストン一人歩きを実行することにした。チップのタイミングもよく把握してない状況だったが、地下鉄にのりこんだ。

「怖いイメージあったけど、ここまできたらやってやる！ってかんじで。いつ襲われてもホテルに帰れるように、スニーカーの底に10ドル紙幣を何枚か忍ばせてたんだ」

思わず固まってしまった私をよそに、Sは話を続けた。ボストンコモンに到着すると、そこはフリーダムトレイルの出発地点だった。フリーダムトレイルとは、ボストンの道に引かれている赤い線で、それをずっと辿ると、史跡や素敵な公園に行くことができるという。全てまわると、片道4、5時間の道のりだ。

昼頃、その中間地点のオールドノースチャーチに着いた。リスもいる緑あふれる敷地内のベンチで、バーガーを食べてしばしの休憩。すると、向かいのベンチにいた若い白人の男性が、話しかけてきた。ちょっとイケメンの彼は、日本で3年間宣教師活動をしていた、という。

「最初はびっくりしたけど、日本語けっこう話してたしね。日本のことをもっと知りたい、って異国の地で言われて、うれしかったよ！」

うれしいことは、もうひとつ。

「将来、日本語教師になりたいんだ。でも正直なところ、最近諦めかけてたんだ。でもこの出会いで、日本に関心持つ人が確実にいるってわかって、いつか必ず日本語教師になりたいと思ったのよ」

初めての海外一人歩きは、Sの背中をぽん、と押してくれるものになった。

（B）

Now

夏休みもバイトがっちり入れて ピカピカのマイ・パソコン

大学3年にして、やっとこさでノートパソコンを手に入れた。家族は新しい高性能なおもちゃが増えたとばかりにみんなで使いまくってる。ま、たいていはカードゲームなんだけど。

そんなノートパソコン、もともと家族内でもいつか買おうという話は出ていたけど、

「いつかっていつだよ」

って話で、結局私が痺れを切らしバイトでお金を貯めようという考えにいたったのだ。家族は興味本位だから別になくてもいいんだろうけど、私は就活する前にほしかったしね。

で、バイトを始めたはいいけれど、それが結構肉体労働で、終わってから学校へ行っても眠くて眠くて……そうそう朝バイトにしたの。でもちょっと考えもの。学校で寝てたら本末転倒だもんね。でもお金はできるだけ早く欲しいし、やってみると意外とこのバイト面白いと思えてきたりして、結局そのまま続行。私の周りの友達もいろいろなバイトやってるけど、時給はいいけど苦痛でしかないバイトとかあるみたいだもの。

やっと手にしたバイト代。初めてこんなに稼いで心はウキウキ！　貯めなきゃいけないのにね。お金が自分のところにたくさんあるだけで満足って貧乏性？　で、お金があるとこれがまた使っちゃうんだよねー。飲みにいっても、「あ、いいよいいよ、私バイト代入ったし。そうなの、今月がんばっちゃってさー」。いやいやそれじゃお金貯まんないから。

でもバイトを始めてほぼ半年、ノートパソコンを買えるまでチリが積もったのである。いやー、貯金金額を通帳で確認したときはホントうれしかったね。これで念願のノートパソコンが買える!!　うきうきしながら電気屋さんへ行き、慎重に選ぶのかと思いきや、店員との相談、っていうかお勧めされたものを、「じゃそれにします」って感じでかなりあっさりと決めてしまった。

そして今、夏休みの始まりにして、貯金がほぼ「0」なのである。

いいもん！夏休みもバイト、ガッチリ入ってやるから！　そして懲りずに、こんどはデジカメを買おうとたくらんでいるわけである。

でもやっぱりお金を貯めて、大きな買い物をどかっとすると気持ちいいよね。蕩尽する快楽……え？それって私だけ!?

（脚）

療養型病院ナース体験
おばあさんの手を握ると おとなしくなった

8月初旬、ゼミの課題である「看護師さんの労働実態」を調査するために昭島市にある療養型病院に行った。病床数102のこじんまりした新しい病院。入院患者の平均年齢は「ほぼ90歳」だという。ターミナルケアを受けている方、ショートステイの方、さまざまな患者がいる。

午後4時から入って、翌日の昼まで看護師さんについてまわることになっていた。看護師さんの仕事は血糖測定、インスリン投与、配膳に体交、おむつ交換など。そのすべてを見たし、手伝ったりもした。

4時の申し送りの後、すぐに看護師さんは各部屋を回って、患者さん一人ひとりに私たちを紹介した。

「きょうは研修生がいるからね〜」

「よろしくお願いします」

ナース服姿で深々とおじぎした。すこし緊張ぎみ。

ほとんどの患者さんはベッドで横たわっていた。なかで時折こちらに視線を送って、顔が合うとにんまり……という患者さんもいた。これ、私だけが体験したわけでなく、別の看護師さんについていた女の子もそうだったらしい。90歳になっても、おじいさん、お元気。若い娘がお好きなのかな。

さてお食事タイム。食事は一同に会してニギヤカに、かと思ったのだが、みな黙々と食べていらっしゃる。どうもしゃべる元気がない様子。会話がない、声がしない静けさがすこし気になった。中大の学食はざわざわと騒々しすぎるけれど。

もちろんみんなのところに出てこられない患者さんもいる。そんな患者さんはチューブを通した流動食。寝たきりで、食べ物を味わえない。チューブ差込口には紫色のあざが滲んでいた。

就寝前には「タンとり」をしないといけない。私たちは見守るばかりだが、看護師さんに言わせると「めちゃめちゃ痛い」ということだった。

「いやだよー」

哀願するような声が個室中に響き渡った。それまで「きょうは暑いね〜」「ご飯はおいしかったね〜」とかわいらしくおしゃべりしていたおばあちゃんである。看護師さんがとり出した吸引機を見たとたんに、だだをこねだした。ベッドで大暴れ……ほどではないが、手足をばたつかせて。

看護師さんは申し訳なさそうに、でも職業上のテキパキとした動きで、鼻の穴や胃に穴を開けている部位からチューブを挿入し始めた。「ごめんね〜、ちょっとで終わるからね〜」

いやいやと言われても、放置していたらタンがからまり呼吸困難で死の危険を招く。看護師さんはやらざるえない。私はすばやくベッドの反対側に回りこみ、おばあちゃんのしわくちゃの手を包んだ。おばあちゃんはおとなしくなった。

バタバタバタ。病院はあわただしい。夜中もナースコールの呼び出しで駆けつけること再三。しかしナースステーションの中はいつも「患者ネタ」で温かい笑いこぼれていた。「○○さんたらね、こんなこと言って……」と、ちょっとしたユーモラスな報告は患者情報を共有することでお互いの潤滑油になったり、激務のなかの〝元気の素〟にもなるにちがいない。

当直の看護師さんについて動き回って15時間。足はむくみ、睡眠不足。私たちはヘロヘロになって帰路についたのだった。

自分の老いを想像しつつ――というにはまだ時間はたっぷりの若さではあるが。

（蕗）

横浜市もゴミ分別収集―「分別盛り」の娘vs父の無「分別」

遅ればせながら、横浜市も十月一日からゴミは分別収集に。ただいまわが家も、「これは燃やせるごみ」「これはプラスチック製容器包装」「資源ごみ」…と「分別」大作戦。これがけっこう楽しい。

「あらぁ、ほとんどプラじゃない。これ、燃やしちゃいけないんでしょ？」「アメの袋とかあり得ないよね。一個ずつ包んであるんだもん」。母（49）とH美（高2）は熱心にごみを仕分けていく。ちなみに豆腐のパックや肉類のビニール包装、お菓子の包装などは大半「プラスチック製容器包装」につき、燃やせないごみである。

H美「でもさぁ、これっていままでは燃やしてたわけでしょ？　ダイオキシンとか問題になってるのに、横浜ってヤバイんじゃない？」

何がどうヤバイというのか。もっと語彙を増やせと言いたいところだが、如何せん女子高生。「ヤバイ」と「あり得ない」と「マジ」だけで会話できる生物である。

「要するに」と母。「横浜は立派なごみ焼却炉があってダイオキシンが発生しない高温で処理できるから、バンバン燃やしちゃえってことだったのよ」。市の担当者は冷や汗の発言だが、慧眼、スミに置けない。

わが家では九月から先行して分別を徹底することにした。ごみ当番のM子（中3）は週3日のごみの日の朝は大忙し。キチンと分別できているか点検しながら家中のごみ箱を回収していく。不正なごみの出し方は許さない。この日、呼び出しを食らったのは父（49）だった。

「おとーさんっ!!」

M子のキンキン声が家中に響く。

「な、なんだっ。どうしたっ」。父はあわててリビングに駆けつけた。ネクタイは中途半端に首に引っかかったまま。その目の前に突き出されたのは、昨晩ごみ箱に捨てたタバコの空き箱。

「外側の透明フィルムはプラスチック容器包装、紙箱は資源ごみ、中の銀紙は燃やせるごみ！ちゃんと分別してって言ってるでしょっ！」「す、すまん…」「もうっ」

M子は、プンスカ怒りながらひき返していった。ため息まじりに、フィルムと紙箱と銀紙選り分ける父の背中が、すこし寂しい。

（雪）

人生いろいろ、人模様 バイト仲間の立ち話

「この間、学校から前期の学費振り込みのお知らせがきたんだけど、54万だってさー。ほんと高いよねー」

帰りが一緒になったバイト仲間のTさんである。

「えっ、自分で払ってるの??」

「他にだれが払ってくれるっていうの？」「……」

学費は親が払ってくれるものと、当然のように考えていた。頭にパンチをくらった感じ。

確かにTさんは平日にも入ったりするし、休みにはバイトをはしごしたりする。ちなみに、彼女はS大の3年生。いまは彼氏と同居中。がんばり屋さんだ。

毎朝5時からバイトしているAさんは大学は卒業したらしい。

「学校、楽しい？オレは法学部だったよ。あれ、民法だっけな？あれはまあ面白かったけどね。そろそろ就職しようかな。でも就活したことないしなー」

Aさんはバンドを組んでいて、自分たちの曲をバイト中にかけていたりする。身近で初めて出会ったバンドマン。特有のおおらかさがある。

Nさんは私の母親と同じような年回り。「あーたしさー、ここでバイト先が3つ目なんだよね。最初5年くらい働いて、そのあと池袋のパン屋さんで10年くらい働いてさ、それでここに来て……ずっとバイトしてんのよ。たいしたお金にはなんないけどさー。でも、ね、多少の足しにはなるでしょ。ここは平和よね。変なお客さんめったに来ないし」

なにしろ、「池袋んときなんかすごかったわよぉ。そうよ、芸能人も来たわよねぇ。○○とかだって池袋だもんねぇ。けど、夜の客とか怖くてね。その点、この店はいいねぇ。ひどい客とかいないでしょ」。

客がいないときには、こんな調子で話は尽きない。歳の差を忘れて、ついタメ口で話したくなるような、明るさ、自由気ままさ。一面、これでいいのかな？とも思うけど。

バイト始めた不慣れな私に、1から親切に教えてくれたのもこのNさんだった。

バイト先のいろんな人模様である。

（緒）

熱中マラソン――ぐんるり。蔵王の天地が回転した

朝5時40分。不気味に静かな重低音にギクリとし、布団から腕だけ伸ばしてアラームを止めた。着メロに「運命」だなんて、と笑われたりするがその効果は絶大である。

――ね、眠い……

背中と首、肩の辺りがずっしりと重い。寝不足で頭はボーっとしている。合宿4日目、早朝マラソンも最終回で記録測定会、だというのに。

五輪出場で「社会的認知」を得た女子ホッケー。そのまた卵の、中大サークル「くるみクラブ」の夏合宿である。

「おはよーっ」

同期のMはハツラツと準備運動に取りかかっていた。元陸上部の彼女は今年も好記録狙いか。号砲と同時に飛び出していった後姿が頼もしい。やや脚が跳ね上がり気味に見えるのはハードル選手だったせいかな？

先頭集団をやりすごし、こちらは後方集団。前を走る先輩のT子の後ろにピタリとついて、いつものように後半で追い抜きをかける――はずが、アレ、今日はペースが違う？

――ハハン、T子先輩、記録会だからって飛ばしてますね。それじゃ後半、ぜったいバテますって。

好敵手の思惑を感じ取ってペースを緩めた脇を、後輩4，5人が次々と追い抜いていく。平坦な道のりが下りにさしかかり、急な坂道に入ると俄然スピードも上がる。中には「止まらない～っ」と転がり落ちるように走っていく者もいるが、それはそれでけっこう体力を消耗するのだ。落ち着いて、後半に備える。

坂を下りると再び平地に戻り、清流の横道をひたすら走る。ここから徐々に速度を上げていく、作戦。1人、2人……じわじわと距離を詰めて抜いていく。前方にT子先輩を発見。十分、射程距離内である。

そしてコースは最後の難所、〝地獄の上り坂〟へ。われながら情けなくも、ここでペースががくんと落ちた。歩いているのと大差ない、ほとんど〝足踏み状態〟。

――歩いちゃダメだっ！　絶対にっ、歩かないっ！

落ちかけていた視線を前方に戻すと、すでに歩き始めた後輩の姿がチラホラと視界に入ってきた。今年は途中バテ組がいつになく多いようだ。頭の中では〝歩いてしまえ〟という誘惑の声がひっきりなしに囁く。

パーンッ！！

勢い良く自分の頬をひっぱたくと、少し目が覚めた。すれ違いざまに後輩がギョッとした顔で振り返ったが、気にすることはない。歩いてたまるかっ。もう、なりふり構わず地面を蹴る。

「腕を振れ。そうすれば足は自然とついてくる。腕を振れ」。高校時代の顧問の言葉を繰り返し言い聞かせ、ただひたすら腕を振った。過呼吸寸前、もつれる足でなんとかゴールにたどり着いた。

――あぁ、カンソウ……。

言いかけた瞬間、ぐんるり。大地が大きく回転した。青い蔵王の空がやけに広く感じた。フワフワと宙を歩くような感覚から、いつのまにかしゃがみこみ、気がつくと芝生の上に横たわっていた。

睡眠不足や疲労が重なり、軽い熱中症……。病院で点滴を受けながらしみじみと反省したのは「頑張りすぎるのもほどほどに」だった。

死ぬ気で走って死にかけたのは、後にも先にもこのときだけである。

ああ、激しい夏、熱中症の夏合宿。中大女子ホッケー・チームに栄光あれ。

（雪）